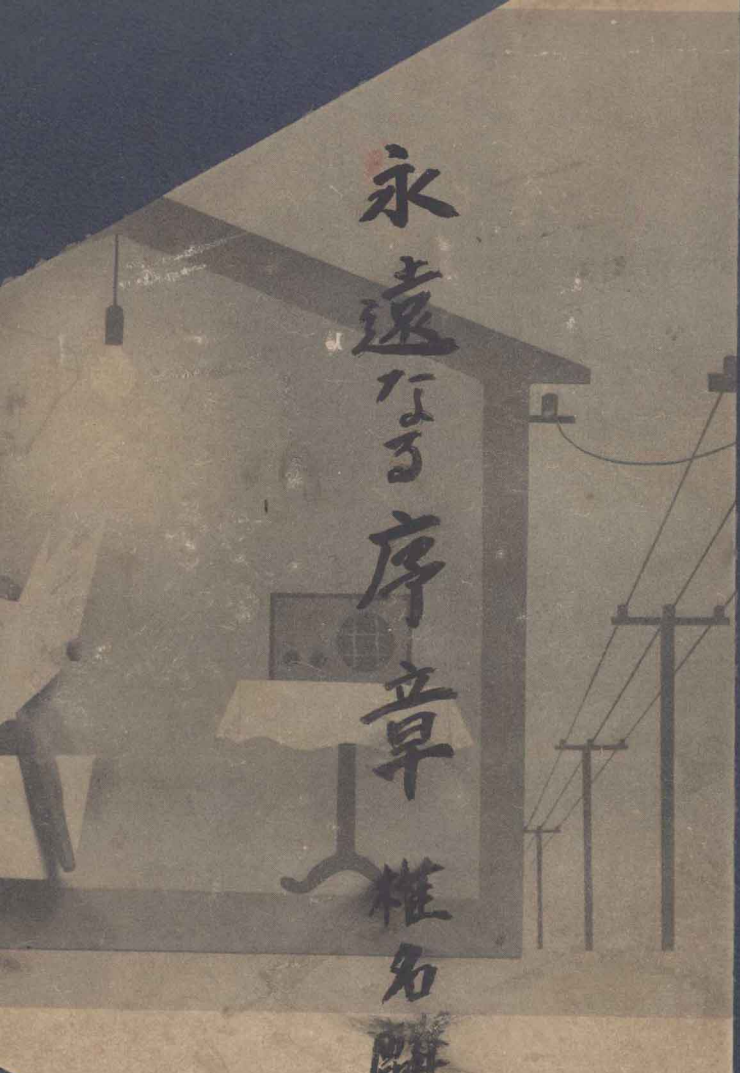

永遠なる序章

椎名麟三著

to share and enjoy the benefits of so

説小篇長しろ下き書

検印

永遠なる序章

昭和二十三年六月二十日 印刷
昭和二十三年六月二十五日 發行
定價一三〇圓

著者 椎名麟三

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行者 河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出書房
編集者 坂本一龍

東京都千代田區内幸町二ノ二〇
印刷者 森昌示

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行所 河出書房
會員番號一一一〇一四

永遠なる序章

一

日はもうたそがれてゐる。風が強い。砂川安太は、後を振り返つて、今そこから出て來たばかりの病院を見ながら、思はず忌々しい声で呟いた。——まるで大きな墓みたいだ。

その古びたコンクリートの建物は、樹木にかこまれて、全く墓のやうにひつそりしてゐる。夕闇にうかんでゐる玄関の車寄せまでが墓場のやうに白々しい。安太は、溜息をつくと、そこに見えるお茶の水の駅の方へのろのろ歩き出した。その彼の姿は、彼自身まで、墓場の番人であるかのやうに見栄えのしない恰好である。機械油のしみのある復員服、そして左足が少しをかしい。義足なのだ。それは歩くたびに、微かないやな音を立てる。肺の駄目なことは知つてゐた、と彼は心に呟く。しかし心臓までが駄目になつてゐやうとは知らなかつた。

试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さう。今となつては、一切がもう無駄なのだ。歩くといふことさへ無駄なのだ。

安太は、やつと橋まで來ると、もう立つてゐることも出來ないやうに、欄干に凭れかゝつてゐた。眼の前が暗く、このまゝ死んでしまひさうな氣がする。駅から吐き出された多くの人々が、夜にせき立てられてあはただしく彼の後を通る。しかし彼には、もう何を考へる力もない。安太は、溜息をつくと、もう一度橋の下を眺めた。山の上から谷底でも見るやうにその水は遠い。ふいに自分の傍で、何かの火の粉が、強い風に小さくとび散つた。氣が付くと、煙草の火なのだ。そして更に氣が付くと、すぐ傍に人間がゐるのである。若い勤人風の男で、人待顔に駅の方を眺めてゐる。瞬間、安太はひどく感動してゐる。死を宣告されたやうな今、すぐ傍に人間のゐることに氣付くことの出來る自分が強く心を打つたのだ。彼は救はれたやうにその若い男へ話しかけたい衝動を感じた。そして彼は上衣のポケットをさぐつてゐる。何ヶ月も前の、煙草を吸つてゐたころの吸ひさしが、くたくたになつて出て來た。

「すみません、火を。」と安太は云つた。

だが、やつと煙草の火を吸ひつけると、彼は忽ちむせてゐる。火を呉れた男は、うろんさ

うに安太を眺めると、駅の方へ去つて行つた。安太は打ちひしがれたやうに、煙草を川の方へ捨てた。だが、それは赤い火の点となつたまゝなかなか落ちて行かないで空中に長くとゞまつてゐる。一体どうしたのだらうと彼は不安になつて息をつめてゐる。しかしそれはふと消える。やはり落ちてゐたのだ。たゞ橋の上からはその川面が余りに深すぎるのだ。

安太は、ほつと吐息をついた。するとその彼に、昔身投げをしたときのことが思ひうかんでゐる。さう、それは十六のときだつた、と彼は考へる。するとそのときの感覚が、ありありと彼の肉体によみがへつてゐる。それは思ひがけない新鮮な感覚である。少年の彼は、息がつまつてもがいた。それでゐながら、彼は、水の中が夜だといふのに晝のやうに異様に明るいのを見てゐた。しかもその明るさは、やはらかなあたゝかい諦めに似た平和を、自分の身体中に沁み渡らせてゐた。全くそれは思つてもみない新鮮な感覚だつた。しかし次の瞬間には氣を失つてゐたのだが。

しかし自分は、どうしてあのとき自殺出來たのだらう。その安太に、幼時からの生活が思ひうかんでゐる。物心ついたとき、彼は、四畳半と三畳の汚ならしい長屋に住んでゐた。最

初の五つか六つのころの記憶は、どうしてか波のやうにそり返つてゐる眞黑に汚れ切つたチャブ台なのである。その脚は、一本とれてゐて、有り合せの板切れでそれを補つてあるのだが、ひどく不安定だつた。彼は、そのために食事のたびに粗相した。そのたびに兄や姉が騒ぎ、母がわめき、父の堅い拳固が彼の頭にとんだ。全く粗相するのは、多い家族のなかで、きまつて自分だけなのが彼には判らなかつた。しかも彼は、食卓に向ふと、苦痛なほど緊張してゐたにかゝはらずやはりとんでもないことが起るのである。彼には、一寸した自分の動きにさへ自分を不幸におとし入れるそのチャブ台が、意地の悪い鬼婆のやうな氣がしてならなかつたのである。

それからあの死の疊だ。表はぼろぼろになつて台だけになつてゐる四疊半の隅の疊である。病氣になつた者は、その場所を專有する特權が許されて、そこへ病床が延べられる。すると不思議なやうに死んでしまふのである。彼の兄姉も父もそこで死んだ。少年の彼は、最初次の姉が死んだとき、その疊が死の疊であることをさとつたのである。そして彼は、父や兄などがそこで死んで行くのを見た。しかし彼は、それを口にすることは出來なかつた。狹い家

では、そのほかに病床をとるどんな可能な場所があつただらう。しかもそれを口にするといふことは、かへつて家族の者たちに不快を與へるに過ぎないだけではないか。だがそのためにそれを默つてゐなければならないといふことは、やはりひどい苦痛だつた。だから彼にとつては、その疊は、いつの間にか恐怖的となつてゐた。ふと、その疊の上に寢轉んでゐる自分に氣がついたりすると、思はずあはてゝとび上つた。そして數日は、その疊から氣味の惡い死が沁み移つた氣がして、自分で自分の身体に脅えつゞけてゐなければならなかつたのである。

死はそのころから彼の前に立ちつゞけてゐた。そして遂に最後には、自分と母だけになつてしまつたのだが、母は、自分の母でありながら、愛することの出來ない醜い老婆になつてゐた。そして内職のかもじのきたならしい毛を梳きながら、始終泣きさうな疲れた声で、もう生きるのは嫌だ、嫌だと呟いてゐた。

そのころ小学校を卒業した安太のつとめた小さな燐寸工場が思ひうかぶ。震動するために燐寸の棒を立てる枠から外れてとび出した金具を、バケツへ拾ひ集めて歩くのが彼の仕事だ

つた。その鉄の金具は、小さなバケツに半ばもたまると、力弱い彼には、どうしても持ち運ぶことが出來ないのだ。しかし後から後から金具はとぶ。少しづつ運んでゐては間に合はないばかりか、親方がどなり散らすのだ。だからどうしても出來るだけ多く運ばなければならなかつた。そのバケツの重さから、生活の重さを、生きることの重さを、少年の彼は、身にしみて十分すぎるほど知つたのである。その彼は、いつも腰をかゞめて歩いてゐなければならないために、少年でありながら老人のやうに腰が曲つてゐた。そしてある日、母はあの疊の上に床を延べて寢て居り、翌朝死んでゐた。彼の十六のときである。その夜、彼は、言問橋の近くの河岸から身を投げた。生活と、死の恐怖から逃れるために。——

安太は、我に返つて呟いた。何を今、くだらないことを思ひ出してゐるのだらう。しかも自分にとつて重要なときに、何故こんなくだらないことしか思ひうかべることしか出來ないのだらう。省線が、轟音を立てゝ同じ橋の下を通つてゐる。彼はもう暗くて見えない川面から眼をあげ、ぼんやり駅の方を眺めた。人々が構内に渦を卷くやうにあふれてゐる。思はず彼は心に叫んでゐる。全くどうすればいゝのだらう。あの医者の言葉から考へれば、もう自

分は永くはないのだ。つまり日頃から自分が心から願つてゐたやうに、この世からおさらば出來るわけなのだ。全く願つたりかなつたりといふわけなのだ。それだのに歩く氣力さへなくなつてゐるなんて滑稽ではないか。自分がこの世からすつかり消えてなくなつてしまふといふことが、今となつてはそれほど恐ろしいことなのか。

氣がつくと、安太は渦卷く人々を羨しさうに眺めてゐるのである。そしてその自分に氣づいた刹那、彼は、云ひやうのない強い戰慄につらぬかれてゐた。しかしその彼は、思ひがけなく神祕な不可解な感情に圧倒されてゐる。その戰慄は、恐怖のそれでありながら、性的なエクスタッシイに似た不思議な歓喜にあふれてゐるのだ。彼はぼんやり考へる。一体自分は何に襲はれてゐるのだらう。そしてこの胸に強く満ちてゐる歓喜は、一体何なのであらう。彼は耐へがたさうに深い吐息をした。瞬間、彼は再び戰慄してゐる。しかしその胸の歓喜は戰慄のたびに一層力をまして彼を揺り動かし、それはまた胸のなかの烈しい光のやうに実感される。全く自分は、どうしたのだらう。死ぬより仕方のない今、これではまるで自分は希望にみちあふれてゐる人間のやうではないか。全く自分はどうかしてしまつてゐるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安太は、何ものかに押しやられてゐる自分を感じながら病人とは思へない勢ひで、駅の方へ歩き出さずには居られなかつた。その彼には、常にないなつかしさで、竹内銀次郎の白い顔が思ひうかんでゐる。そして何故、日頃疎遠な銀次郎の顔が、今自分の胸にうかぶのか、安太には判らないのだ。しかも今の彼に一番痛切に必要なもの、つまり彼の病氣を一挙に快癒させる薬品といふやうな感じで銀次郎に会ひたくなつてゐるのである。彼は、歩きながらも途方に暮れたやうに呟いた。なるほど、銀次郎は医者だ。しかし医者に会はうが何をしようがもう無駄なのである。それだのに自分は、どうしても行くのであらうか。それより下宿へ帰つて寝てゐる方が賢明ではないのであらうか。

だが安太は、東中野にやつて來てしまつてゐた。彼は坂道を上つて行つた。日はすつかり暮れて、薄暗い星明りのなかに、取り片づけられもしないで空襲のとき以來捨て置かれてゐる焼跡が、自然に崩壊した廃墟のやうなある野趣のある姿となつてひろがつてゐる。彼は、

漸くそのなかにたゞ一軒ぽつつりと立つてゐるバラックへ辿りついた。板壁のどこかゞゆるんでゐるのであらう、低い腰の羽目板の隙間から、一條の光が洩れてゐる。彼は、その銀次郎のバラックの入口にしばらくたゝずんでゐた。何のためにこゝへ來ずに居られなかつたのか、今となつてもやはり彼に判らないのである。

やがて安太は、仕方なささうに入口の板戸の外から二三度声をかけた。しかしなかはひつそりしてゐて、何の應答もない。彼は、かへつて安心したやうな氣持になつて、ぼんやり四辺を見廻した。遠く新宿の灯が見える。だが、ふと氣が付くと、彼は、危險なほど低く垂れてゐる黒々とした電燈の屋外線を見てゐた。たゞ電燈の屋外線が垂れさがつてゐるだけである。しかし彼には、それが何故か不吉な感じがしてならないのである。さうだ。世の中の一切がゆるんでゐる。今に何事かゞ起るだらう。しかしその何事かは、もう既に自分にやつて來てゐるのではないだらうか。さうだ。先刻病院を出てからだ。

安太は、我に返つて、もう一度声をかけたが何の應答もない。寢てしまつたのかも知れないと彼は考へる。それならそれでよかつたのだ。彼は帰らうとして、遠くを眺めた。そのと

き何ものか得態の知れない力が自分をつかんでゐるのを感ずる。その彼はもう強く入口の戸をたゝいてゐる。何故病院を出たとき、どうしてもこゝへ來なければならない氣がしたか、彼には判らない。しかし自分はどうしてもこゝへ來なければならない氣のした自分を信ずるより仕方がないのだ。彼は再び強く戸をたゝいてゐる。しかしやはり何の應答もない。彼は遂に入口の戸に手をかけた。すると立てつけの悪いその板戸は、思ひがけなく簡單に外れるやうな勢でひらいた。そして安太は、銀次郎の起きてゐるのを見た。銀次郎は一間きりしかない六疊の片隅の柱に凭れ、紺色のズボンに茶褐色のジャケツを着た姿で、何かの木ぎれを彫つてゐる。銀次郎は突然夢をさまされた人のやうな、見知らぬ人を見るやうな眼を安太に向けながら、重苦しさうにいふのである。

「お前か。」

安太は仕方なささうに微笑しながら上り口に腰を下ろした。そしてしばらく銀次郎の透きとほるやうに白いとゝのつた顏を見てゐた。それは全く病的な感じがするほど白い。そして安太は銀次郎が軍医少尉のとき、色を白くするために亞砒酸を飲んでゐたといふ噂のあつた

ことを思ひうかべてゐる。しかしそれは單なる噂にしか過ぎなかつたのであらう。銀次郎は再び安太には無関心に、木屑を膝のあたりへ散らしながら、小刀で木を彫りつゞけはじめてゐる。その態度には周囲への徹底的な無関心さが感じられる。だが安太は再び人のいゝ微笑をうかべながら、その銀次郎へ声をかける。

「何を彫つてゐるんです。」

すると銀次郎はふと我慢ならないやうに、彫つてゐた手を膝の上へ落した。そしてしばらくぼんやり、自分は何を彫つてゐるんだらうといふやうに、細長い木片を見てゐる。それから自分を嘲るやうな痙攣的な笑ひ声を立てながら、ひとり言のやうにいふ。

「煙草のパイプだよ。」

「煙草のパイプ？　だつてあなたは煙草を吸はないでせう。」

「だから、お前に呉れてやるさ。」

そして銀次郎は、勢よく安太の傍に投げて寄こした。手にとつて見ると、なるほどパイプである。それは何か臨のある細い木でつくつてあり、その木には出たらめだとしか思へない

模様が刻んである。銀次郎は退屈さうな吐息をすると、低い声でいふ。

「死にてえな。」

安太はその彼へ笑ひかけながら、所在なく家の中を見廻してゐた。さうだ。この家へ來るのは、これでまだ三度目なのだ。それだのに、どうしてこんなに飽々した氣分になるのだらう。そして彼は、家のなかで火を燃すせいか、ひどく煤けてつらゝのやうに下つてゐる蜘蛛の巣を見てゐる。それからたゞ一つの押入れには戸がまだ入らずに古びた灰色のカーテンが吊り下げられてゐて、その裾はぼろになつて垂れ下つてゐるのを見てゐる。それからまたそのカーテンの下から、ざるに入れたしほれた白菜やいろんな空罐がのぞいてゐるのを見てゐる。だがたゞ、それだけで、そのほかに全く何も見えない部屋のなかは寒々としてゐる。しかし、そのほかに何も見えないといふことが判ると、安太は再び飽々した氣分に襲はれてゐた。彼は再び銀次郎を見た。銀次郎は眉に皺を寄せながら、ぼんやりしてゐる。そこには何か滑稽なものが感じられるのである。安太は、思はず銀次郎へにこにこしながらいふ。

「今日、会社から病院へ廻つて、とゝへ來たんです。……何の用事もなかつたんですが。」

「会社？　……しかし俺の知つたことぢやないさ。」

「さうです。そりや、全くさうですが……。」そして安太はふと思ひ出していふ。「いゝものをお見せしませうか。」

安太は持つてゐた大きなハトロンの封筒を、大事さうに銀次郎の方へ手を伸ばしながら差出した。安太のその眼は異様な期待に輝いてゐる。それはまるで卒業証書を親に渡す無邪氣な子供の眼に似てゐる。銀次郎は仕方なささうにその封筒から青いレントゲン写眞を引出した。それは安太の肺のうつつてゐるフヰルムである。銀次郎はほの暗い電燈へしばらく大儀さうに透かしてゐる。氣が付くとフヰルムの青い色が銀次郎の顏に落ち、忽ちその白い顏はいやらしい死人の顏に変つてゐるのだ。やつと銀次郎は、フヰルムを封筒へ入れて安太へ投げ返すと、物憂さうにいふ。

「お前は知つてゐるのだらう。」

「えゝ。大体は病院の医者の言葉で想像がついてゐるんですが。半年持てばいゝ方ですか。」

すると銀次郎は、ふいに思ひがけない激しさで断定する。

此内试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com